

在鸣门 第167期

藍より出でて藍より青し／青取之于藍而青于藍



左上の写真は、藍染め布製手作りマスクです。水洗い、繰り返し使用可能です。

現在、新型コロナウイルス感染の影響を受け、日本各地はマスクが不足しています。その為、国民は知恵を出し、さまざまなマスクを制作し、「手作りマスク」のブームを起しました。藍染めは徳島県の伝統産業で、徳島県民はこの藍染めを活かし、実用的なおしゃれマスクを作り出しました。

藍染めはおよそ1500年前に中国から朝鮮半島を経由して日本に伝来したそうです。日本の藍染め産業は江戸時代に繁盛期を迎え、明治時代は暮らしの基本色となり、国鉄や郵便局の制服まで藍染め布地が使用されていたそうです。

明治8年(1875年)に来日したイギリス人化学者アトキンソンが日本人の藍染めの着物を見て、「ジャパンプルー」と呼び始めたことをきっかけに、「ジャパンプルー」という呼称が広がったと言われています。

藍染めには抗菌、防虫防腐などさまざまな効果があり、藍染めの製品は日本で幅広く使われています。



左上图是由天然蓝染布料手工缝制的口罩。可以水洗、反复使用。

现在，受到新冠病毒疫情的影响，日本各地出现了口罩紧缺现象。但是，日本民众发挥想象力，缝制出了结合当地工艺特色的布口罩，掀起了制作“手工艺口罩”的热潮。天然蓝染是德岛县的传统工艺，德岛县民充分利用蓝染布料制作出了时尚而实用的蓝染口罩。

蓝染约在1500年前从中国经由朝鲜半岛传入日本。日本的蓝染产业在江户时期达到繁盛期，在明治时期，蓝染的颜色几乎成了大众生活的基本色调。据说当时国营铁路局和邮局的员工制服就采用了蓝染的布料。

明治8年(1875年)来日访问的英国化学家 Robert William Atkinson，他看到日本人身上的蓝染和服后惊呼到：“啊，日本蓝！”。自此，“日本蓝”的叫法传播开来并流传至今。

天然蓝染具有抗菌、防虫防腐等多重功效，安全放心的蓝染制品在日本得到了广泛运用。

徳島県は昔から藍染めで盛名を馳せ、日本最大の藍産地として知られています。また、「阿波の国」と呼ばれていたことから、徳島県産の藍は「阿波藍」と呼ばれています。

徳島県を含め、日本全国の藍産業は、安価な化学合成藍の輸入により、一度衰退していましたが、天然藍の魅力は再び人々に見直され、再発展の道を歩んできました。東京2020オリンピック・パラリンピックのエンブレムにも藍染めの藍色が採用されました。



徳島県は藍染めの里であり、ストール、ハンカチ、洋服などの生活用品やお茶、お菓子、料理など、藍染め商品は枚挙にいとまがないほどです。落ち着く天然藍色と安全安心の品質が人々に好まれています。

複雑な工程を経て仕上がった藍染め商品は、一つ一つに職人の知力と精力が込められており、愛情と温もりを伝えてくれます。



徳島県自古就是日本著名的蓝染原料产地。现在日本国内的天然蓝染原料大部分都产自徳島县。徳島县古称“阿波国”，徳島县的蓝染被称作“阿波蓝”。

受廉价化学染料输入的影响，包括徳島蓝染在内的日本蓝染产业曾一度走向衰落。但是，时代变迁，传统蓝染的魅力再次受到人们的重视，天然蓝染走上了复兴之路。2020东京奥运会及残奥会会徽的颜色采用的就是天然蓝染的靛蓝色。



作为蓝染之乡，徳島县内蓝染制品种类丰富、不胜枚举。从围巾、手帕、服饰等生活用品再到茶点、美食等诸多方面，天然蓝染制品以其静谧的色彩和安全环保的特质广受青睐。

传统蓝染工序复杂，每一件蓝染制品都凝聚着蓝染匠人的心血，向人们传达着温情与温度。





徳島では、藍染め工房で藍染めを体験することが出来ます。2018年、徳島県主催の「藍のけしき」という大型空間展に参加しました(左上写真)。展覧された作品は451枚の藍染めハンカチで構成され、このハンカチは 451 名の参加者によって提供されたものです。藍染めハンカチの巨大空間に身を置き、天然藍の深みのある色合いに心を打たれました。

「青は藍より出でて藍より青し」という言葉がありますが、「青は藍より出でる」には、実に長い月日が必要です。種まき、収穫、それから染料になるまで、半年以上かかります。そして、出来上がった染料を利用し、布を染めていく過程も体力と根気の要る作業です。染める回数や毎回の浸かる時間によって色の濃淡が変わりますし、生地 of 形によって布の模様も千変万化になります。ですから、布を染める体験は、私たちに「藍より青」の瞬間を実感させてくれ、無限のサプライズをくれます。

暖かい春になり、再び藍を栽培する季節になりました。藍はまた大自然の中で不思議な旅をして行きます。

在徳島，我们可以在蓝染工厂或作坊体验蓝染染布工艺。2018年，我参加了由徳島县主办的名为“藍之風景”的艺术空间展活动（左上图）。空间展的展品由451条蓝染手绢构成，手绢由451名活动参加者提供。置身于蓝染手绢构成的广阔空间之中，我深深地被蓝染的静谧之美所打动。

我们常说“青取之于蓝而青于蓝”，而蓝染原料的生产让我们知道“青取之于蓝”是一个漫长的过程。蓝草从播种到收割再到发酵制成染料，工序复杂，耗时大半年之久。另一方面，布料的染色过程又是一个消耗体力和耐力的过程。染色的重复次数及每一次浸染的时间不同，布料呈现的颜色深浅就会不同，布料的捆扎等方式不同，完成品的图案也会千变万化。因此，在体验染布的过程中，我们可以切实地感受到“青于蓝”的深意，从中收获无限惊喜。

冬去春来，又到蓼蓝种植季节，蓼蓝又将开启一段奇妙的长途旅程。

部门：鸣门市观光振兴课

地址：鳴門市撫養町南浜字東浜 170

(〒772-8501)

TEL：088-684-1746/FAX：088-684-1339

E-mail：kokusai@city.naruto.i-tokushima.jp

编辑： 翟 羽佳